

見たこと、聞いたこと、

歩いてきた道

第11回 共同作業所と私



松本誠司

まつもと せいし / 1968年、高知県生まれ。全障研高知支部。「障害者の生活と権利を守る高知県連絡協議会」事務局長を務め障害者運動の先頭に立ち続ける。趣味は観劇にスポーツ観戦。それからグルメも。

1977年8月6日、名古屋

の料亭稲本で日本の障害者の歴史上大きな出来事がありました。第11回全障研大会の初日の夜、全国各地の16カ所の共同作業所の関係者90名が集い「共同作業所全国連絡会」（現在のきょうされん）が結成されました。当然、私自身は当時小学生でしたので参加していません。

1970年代、養護学校義務制により教育が保障されたものの卒業後の進路は保障されておらず、障害が重い人たちの家族や関係者が集い共同作業所が全国各地にできていました。高知

では、1975年に私がいた若草養護学校の近くの民家を借りて「すずめ共同作業所」が重度障害者と職員で立ち上げられました。すずめ共同作業所では、洗濯バサミをつくったり古新聞・古雑誌などの回収をしていたことを覚えています。

当時の福祉事業は、「措置制度」といわれ国や自治体がおこなうもので、行政以外には特別に認められた社会福祉法人にしかできませんでした。そのため授産施設をつくるためには、社会福祉法人をつくり、施設を建設するために利用者を20名以上

集める必要がありました。そのためには、まず無認可の「共同作業所」をつくり、「法人化」していくということが必要でした。

すずめ共同作業所は、利用者を増やしながら高知市の建物を借りて運営しつつ、法人化し身体障害者授産施設を建てました。その時、空いた市の建物で「旭共同作業所」ができました。

すずめ共同作業所は、名古屋での「結成」に集った作業所の一つです。旭共同作業所が加盟して県内2会員になりました。その後、作業所土佐、青空共同作業所、あゆみ共同作業所、双

葉共同作業所と5会員を超して高知支部を結成したのが1990年代前半だったと思います。

支部を結成した頃の中心的な要求は無認可作業所への補助金の増額でした。当時、最高額だった滋賀県が1000万円だったのに対して、高知県は200万円程度でした。担当の小田切班長に「補助金の増額が無理なら重度加算を」と要望したら「全部の作業所を回ってきた。重度しかいなかった。加算でなく補助金を上げる」と回答が返ってきました。彼はすべての無認可作業所を訪問して実態を調べ補助金の増額をすすめました。毎年、毎年の増額で500万円を超しましたが、1000万円には届きませんでした。

共同作業所では、養護学校ではできなかったことができるようになる、まさに「働くなかで、たくましく」発達することが全国各地で語られています。誰かが「共同作業所は小さな巨人だ」と言っていました。